



慶應義塾大学ビジネス・スクール

日本企業のコーポレートガバナンスを考える [2]

—— 『後継社長の選任：ソニー、松下、NEC』 ——

5

大野慶は関東ビジネスシステム株式会社の社長の任に就くべく、前任者である早木常代から指名を受けた。就任後の慌ただしい時期が過ぎると、大野は「いずれ自分も後継社長を決めねばならない時がくる」と直感するようになった。早木がどのように考えて、つまりどのような候補者からどのような判断で大野慶に白羽の矢を立てたのか、大野自身には知る由もなかった。

10

「後継社長の問題は早い時期から考え始めるに越したことはない」。大野慶は、旧友である城南大学経営学部の大野慶三教授に連絡し、後任社長の選任について何かよい本はないかと尋ねた。大野慶三教授の返事はそっけなかった。「後任社長の選任はほとんど密室での出来事だから、外部の者にわかる記録として残らない。経営学の研究として非常に大事でも、まずデータがとれない。もちろん過去にまったく本が出版されてないかというところでもなく、事の深層が窺えるような自叙伝的な本はある。加えて興味があるなら大野慶研究室での小規模な調査結果もある」と連絡してきた。

15

大野慶は、手始めに大野慶三教授が紹介した3つの本を読んだ。もちろん他にもきっと出版されているに違いないが、大野慶三教授が知らないだけであろうと大野慶はいぶかった。

20

ソニー：大賀典雄から出井伸之へ

大野慶社長が最初に読んだ本は「ソニー ドリーム・キッズの伝説」であった⁽¹⁾。著者はアメリカ人ジャーナリストで、ソニー社内外の重要人物に対して膨大な時間のインタビューを行い、また社内の重要関係書類を調べることで、井深一盛田一大賀一出井と続くソニー経営をドキュメンタリーした。インタビューはのべ150回に達し、すべて著者の堪

25

このケースは慶應義塾大学ビジネススクール教授高木晴夫が公開資料をもとに作成した。本文中の大野慶に関する物語的記述の部分はケースを読みやすくするために書かれた架空のものである。

30

1. ネイソン (2000)